

ジェイン・アダムズのセツルメント活動における人種問題

I ハルハウスとシカゴの黒人たち

山口 ヨシ子

ジェイン・アダムズ（一八六〇—一九三五）が一八八九年にシカゴに開設したセツルメント、ハルハウスの周辺には、貧しい生活を強いられていた「黒人」たちもいたはずであるが（レジデント 一六）、その活動の記録ともいえる『ハルハウスの二十年』からは、彼らの様子をうかがうことはできない。社会学者で公民権運動の指導者でもあったW・E・B・デュボイスが、エイブラハム・リンカーンの誕生日に講演会を開いたことなどは書かれてはいるものの、貧しい黒人たちがハルハウスを広く利用したという記述はみつからない。「困窮者と人生を分かち合う」という決意のもとに、シカゴの貧民地区に移り住んで社会福祉事業を展開していたアダムズが、援助を必要としていた黒人たちと関わったかという疑問が浮かびあがってくる。

シカゴでは、アダムズが生まれた一八六〇年から『二十年』を出版した一九一〇年までの五十年間に、人口が二十倍に増え二百万人にも達していたが、その約四分の三は外国生まれの移民であった（トラットナー 一

三五)。一八九〇年のアメリカ政府によるフロンティア消滅宣言後、土地を買えない移民層が仕事を求めて大量に都市に流入したためである。「アメリカの夢」の実現を求めて世界中から集まった人びとによって都市化が加速し、第一次大戦前には、シカゴはすでにニューヨークに継ぐアメリカ第二の都市になっていたのである。そのなかで黒人人口は全人口の五パーセントにも満たず、十万にも達しない状態であった（トラットナー 一四五）。ハルハウスの初期の活動のなかで、黒人たちよりも移民たちを援助するための取組みが目立つが、これは、当時のシカゴの人口構成から考えれば当然ともいえる結果であったといえるだろう。

だが、『二十年』にも書かれているように、アダムズが人種や階級などの違いを「本質的に相互依存的」ととらえ、「人間を平等にしているものは分け隔てているものよりも優れていて、基本的な類似性が適切に強調されれば、人種、言語、信条、伝統などの比較的本質的ではない違いは超えられる」と考えていたとすれば、社会福祉事業家としての、彼女の黒人たちへの対応をあらためて考えてみる必要がある。アメリカでセツルメント活動に従事することは、特別の例外を除けば、厳しい生活を強いられていた移民や黒人たちに囲まれて生活することを意味していたはずだからである（デイヴィス〈2〉 八四）。事実、ハルハウスのレジデント（住み込みのスタッフ）が一八九五年に出版した『ハルハウス周辺の地図と報告書』においても、セツルメント周辺の狭い地区に十八の異なった民族が暮らし、多くの黒人もケンタッキーから移り住んでいることが記録されている（一六一―一七）。十万にも満たなかったという当時のシカゴの黒人人口も、二百万都市の四分の三を占めていた移民と比べれば少ないかもしれないが、人種偏見や貧困と闘っていた数字だったとすれば、決して少ない数字ではなく、社会福祉事業の対象となるべき大きな集団であったといえるだろう。

とくに、二十世紀への転換期におけるシカゴには、N A A C P（全米有色人種地位向上協会）を設立したデユボイスに加えて、黒人への反リンチ運動をくり広げていたアイダ・B・ウェルズも住み、また、ハルハウスには、アフリカ系アメリカ人医師のハリエット・ライスも参加していた。さらに、ハルハウスの最大の資金援助者の一人で、アダムズの死後、その運営を引き継いだライス・デコーヴェン・ボーエンは、一九一三年に『シカゴの有色人種』を出版し、当時のシカゴにおいて黒人たちがおかれていた状況を報告していた。このような事実だけを考えてみても、当時のシカゴにおける黒人問題が決して小さな問題ではなく、したがって、そのような問題にアダムズが社会福祉事業家としていかに対処したかということを追求する意味が生じるであろう。

本稿では、リンカーンの友人で奴隷制廃止論者であった父親やイースト・ロンドンでセツルメント活動をしてきたサミュエル・バーネットなどの影響を受けて社会福祉事業に取組んでいたアダムズが、いかに黒人問題に対応したかを考えてみたい。その対応をとくにライス、ウェルズ、デユボイス、ボーエンとの関係などから探ってみたい。

Ⅱ カレッジ・ウーマンのセツルメント活動―白人女性と黒人女性

アメリカにおけるセツルメント活動は、南北戦争後とみに発展した女子高等教育との関わりを無視して語ることはできない。大学で高度な学問を修めた女性たちの多くがその学識を広く社会で生かすべくセツルメント

活動に参加し、それによって大いなる発展を遂げたためである。たとえば、東部の名門女子大学スミス大学の卒業生は、十九世紀末には、その九割近くがセツルメントに加わったという記録もある（ルーメニア 四八）。女性に与えられた領域でエキスパートになるためには女性雑誌が与える以上の教育が必要だという考えのもとに発達した女子高等教育であったが（エヴァンス 一三九）、大学で高度な専門教育を修めた優秀な頭脳が、社会還元の一つの発露としてセツルメントに注がれたということである。良家の子女は貧しい女性たちのように賃金労働について「身を落とすことはない」という価値観が、娘の高等教育に熱心であった中産階級層を圧倒していた時代にあって、セツルメントは大卒の女性たちに意義ある社会活動の機会を提供していたのである。「若者を教育し、貧しい人びとの世話をし、女性と子どもの健康を増進させる」といったセツルメントの仕事は、一面で「母親としての技術と能力をより必要としている世界に開放するのだ」という主張の後ろ盾となつたとみることもできるだろう（エヴァンス 一四八）。

セツルメントはこのように、よき家庭人を育成するために専門教育を施すという女子大学教育の矛盾の受け皿となって発展し、一九〇〇年には全米で百を数え、一九一〇年までには四百にも及んだ（トラットナー 一四三）。アダムズ自身、大学卒業後「何もしないというもっとも辛い仕事」（スターレット 一三）に八年も悩んだあげくソーシャル・ワーカーという「職業」を作りだして人生の意義をみつけたが、セツルメント活動に従事した大卒の女性たちの多くは、社会に活動の場を得ることで女性の大学教育が無駄ではないことを証明したのである。

ハルハウスに参加した女性たちだけをみても、その活躍には目を見張るものがある。全米消費連盟の事務総

長になるフローレンス・ケリー、連邦労働省児童局の初代局長になるジュリア・レースロップ、ハーバード大学医学部で女性初の専任講師になるアリス・ハミルトン、シカゴ大学で教鞭をとり、女性初の国際会議代表としてパンアメリカン会議に出席するソフォニスバ・ブレキンリッジなど、多くの大卒女性たちがセツルメントで公共政策などの修練を積み、その後国家レベルの社会改革に挑んでいる。女性の「適切な領域」を家庭内に限定するヴィクトリア朝的女性観から抜けだしきれない社会のなかで、彼女たちはセツルメント活動をおして社会活動の幅を広げていったということができよう（山口 一二八）。

中産階級出身の白人女性たちが、大学教育を生かしてこのような発展を遂げていた一方で、大卒の黒人女性がハルハウスに参加し、アダムズなどとの間に軋轢を起こしていたことは見逃せないことである。その軋轢の原因がおもに人種の違いに起因していると思われるとき、アダムズが『二十年』で掲げているセツルメントの理想が現実の活動のなかで機能していなかったともいえるからだ。人種や階級の違いは、基本的人権を尊重し合う関係のなかでは重要ではないとしていたアダムズの考えが、少なくともハルハウスのレジデントの間で実現されなかったことになる。アダムズがハルハウスを開設した四年後の一八九三年から、ハルハウスにレジデントとして参加した医師ライスの例は、高学歴のアフリカ系アメリカ人女性が、大学卒業後に直面していた困難の一例をきわめて深刻な形で示しているといえるだろう。

ライスは、十九世紀末のアメリカでもっとも高い教育を受けた女性の一人であり、黒人女性としてはじめて東部の名門女子大学ウェルズリー大学を卒業したばかりでなく、当時女性を受け入れていた医科大学の最高峰ともいえるミシガン大学やニューヨーク女子医大で学んで高度な専門職を獲得した人物である。⁽²⁾ 黒人の教育を

受ける機会がきわめて制限されて時代³⁾に、白人のエリート女性に負けない学識をそなえてハルハウスに参加していたといえるが、このような輝かしい経歴をもちながらも、彼女の活躍の様子は、アダムズの『二十年』などには記録されていない。『二十年』にはアダムズとハルハウスに関わった数多くの人物名とその活動内容が記録されているが、ライスのことが言及されていないことは、他のレジデントの場合のように、アダムズとともに改革のネットワークを展開できなかったというものの一つの証ともなる。ハルハウスに参加していながら、極端に情報量が少ないという空白の部分から、ライスが直面していた問題が垣間見えるのである。

ライスがハルハウスで活躍できなかった事實は、アダムズがパートナーのメアリー・スミスに宛てた手紙によって確認することができる。そこには、一八九三年、セツルメントの医療施設で働いていたライスが貧しい移民の診察を拒否したことに對するアダムズの憤りが記されている。アダムズは、「病気の隣人に尽くすことを完全に拒否して、私たちを怒らせている」とライスへの怒りをあらわにしている（ナイト 三八七）。ライスの診療拒否は、移民たちだけでなく、黒人たちへも及び、一八九五年には、恵まれないアフリカ系アメリカ人に医療を施すために設立された病院で働くことも断っている（三八九）。ボーエンの『シカゴの有色人種』によれば、この病院は医者、看護師、患者の間において偏見がなく、黒人が自慢するような医療機関であったということであったが、ライスにはそのような感想をもてなかったことになる。隣人と苦しみを分かち合うことを目的とするセツルメントに参加しながら、医者であるレジデントが病に苦しむ隣人の診察を拒否したとすれば、その時点で彼女の存在意義は失われていたことになる。

貧しい隣人の診療を固辞したライスに対してアダムズは、「セツルメント精神をもっていない」と断罪して

いたが（シュルツ、ハスト 七四一）、問題は、なぜ困窮者の医療を拒む医者がセツルメントにいたかということである。第一に考えられるのは、ライスが好んでハルハウスに参加したのではなく、それ以外の選択がなかったということである。ウェルズリー大学の卒業生の五割が卒業した年に、九割以上がその翌年にはセツルメントに加わっていたという当時の状況のなかで（ルーメニア 四八）、ライスにはハルハウスに行く以外に選択がなかったという推測も可能になる。ライスのハルハウスにおける立場は他のレジデントたちと異なり特別な自由を許されたものであったが、開業することもままならない経済状況のなかで（マンシー 二二、シュルツ、ハスト 七四一）、彼女は仕方がなくハルハウスに加わったことであろう（ナイト 三八六）。

ライスが貧者の治療を固辞した背景には、彼女がそれまでに受けてきた差別の影響があったと考えられる。一つには、女性医師に対する偏見にもとづく差別である。一八九三年十月二十九日付けの『ニューヨーク・タイムズ』紙には、女性医師に対する偏見についての記事が掲載され、「立派な医学教育を受けた女性によって重要な仕事ができ得るという考え」を実現しようとして、「完全なる社会追放」にあったというエリザベス・ブラックウェルら女性医師のパイオニアたちの苦難の歴史が概観されている。十九世紀末のシカゴでは、ライスのように大学卒業後専門教育を受けた医師は半数程度であったが、立派な学歴をもちながらも、彼女は他の約二百人の女性医師と同様、男性医師が支配する病院では診察をさせてもらえないというような差別に直面していたという（シュルツ、ハスト 七四〇）。「まともな家庭では女医を受け入れない」という古い偏見が、当時のシカゴにおいても払拭できず、女性医師は、厳しい訓練を経て専門家となっても、その専門を实践する場で「巨大なるハードル」を越えなければならなかったということであろう（七四〇）。

ライス自身、後年、「医者の世界は男性中心の世界で、女性を登用するのは、男性が女性を援助できるとき、または邪魔できるとき以外にはない」と断言している（シュルツ、ハスト 七四二）。だが、ハルハウスにはほかにも女性医師がいて、その活躍が『地図と報告書』などからも確認できるとすれば（五九）、ライスは女性医師である以上の問題を抱えていたことになる。

ライスが直面していたより大きな偏見は人種的なもので、このことは、一九三五年、ウェルズリー大学が卒業生対象に行ったアンケート調査に対する答に端的に表れている。ライスは、数ある質問のなかで「あなたの活動に決定的であった物理的または他の障害はありましたか」という質問一つだけに答え、「私は黒人であるが、そのことは神の祝福を受けたこのキリスト教の国ではいかなる罪を犯したよりも不名誉なことです」と肉太の目立つ文字で書いている（シュルツ、ハスト 七四二）。高度な専門教育を受けた黒人医師が四十年余りのキャリアを振り返ってこのように書いたということは、きわめて重い意味をもっている。医者として、白人医師から差別を受けただけでなく、患者からも差別を受けていたことの証のように思われるからだ。

ライスがハルハウスにいた当時のシカゴでは、白人医師が黒人医師には患者をまわさず、患者も、黒人医師に診察されることに恐怖を示したという（シュルツ、ハスト 七四〇）。ハルハウス近隣の貧しい人たちは東欧や南欧からの移民にしても、いわゆるアメリカ人にしても白人が多く、彼らは強い人種偏見をライスに示していたことが予想されるのである（七四二）。貧しい人の診察を拒否する前に、ライスの方が拒否されていたといえるだろう。

ライスは貧しい白人だけでなく黒人を診察することも拒否しているが、その事実には優秀な黒人としての、野

望の強さの証をみることができる（ナイト 三八八）。白人に負けないキャリアを積んできた彼女にとって、貧しい黒人に接することは、黒人の有能さを証明しようとして努力してきた過去に戻ることを意味していたともいえるのである（三八八）。当時のアフリカ系アメリカ人女性医師のほとんどは、同人種の患者を診察し、同人種の医者を養成するために尽力していたが、人種統合を信じていた上昇志向の高い家庭に生まれたライスにとって、そのようなキャリアは失敗を意味していたのであろう（シュルツ、ハスト 七四二）。八年以上も大学や医科大学で学び、超一流の学問を修めたという自負が、開業することはおろか、患者を診察することさえままならないシカゴの現実のなかで傷つけられていったということであらう。

ライスがハルハウスで力を発揮できなかったことをアダムズの視点で考えれば、一つには、恵まれた白人中産階級の家に生まれたアダムズには、ライスが直面していた黒人医師としての困難さが実感し難かったということがあげられる。医師という専門職に挑んだ当時の黒人女性たちは、自分たちが同人種の代表であるという意識を強くもち、「どんなに苦しくても、奴隷時代より悪くはなり得ないという悟りから生まれた樂觀主義に駆りたてられて頑張った」（アペセカー 一〇九）といわれる。このような黒人女性たちの意識や気負い、さらには、そこから派生したかもしれないある種の頑なさ、社会的・経済的に安定していた立場にいたアダムズには、理解し難いものであったのであろう。その理解不足が、患者からも差別されていた医師にセツルメント精神を要求するというような、「非現実な要求」となって表れたと推測できるのである（ステブナー 二二二）。

東部の名門女子大から医科大学へというコースは、アダムズが望みながら断念したコースであるが、それを

成し遂げたライスにはセツルメント精神が備わっていると信じて疑わなかったところに、あるいは、備わっているべきと考えたところに、アダムズの盲点があったというべきかもしれない（ナイト 三八八）。人種偏見の強かった時代にあつて、ライスをレジデントとして受け入れ、白人のレジデント同様に扱ったとすれば、そこにはアダムズが『二十年』でも特筆する実父やリンカーンの教え——人間の基本的人権への敬意やアメリカの「もっとも貴重な財産」としての民主主義——を实践しようとする意思がうかがえる。だが、黒人女性としてのライスの個別の事情を配慮できなかったとすれば、アダムズが中産階級出身の白人女性としての意識を超えることができなかったといわざるを得ないだろう。「私たちを怒らせている」というアダムズの文面の「私たち」という意識のなかに、ライスを「他者」にしてしまった「無意識の人種差別」があつたかもしれないのである（ステブナー 二二二）。

ライスは、ハルハウスで白人の大卒女性のように能力を十分に発揮できなかったことで、当時の黒人の大卒女性が直面していた問題と、セツルメントにおける人種問題の難しさを明らかにしたといえよう。人を責任ある部署に配置し、その能力を発揮させることに長けていたというアダムズが（ボーエン〈2〉 八八）、ライスに対しては「たえず困惑し」、その福祉精神が欠落していると結論づけるに至ったことには（シュルツ、ハス ト 七四一）、やはり、両者の間に人種の壁があつたといわざるを得ないだろう。

Ⅲ 反リンチ運動をめぐって——アダムズとウェルズ

アダムズの黒人問題に対する意識は、反リンチ運動をくり広げていたウェルズとの関係によっても明らかになる。ウェルズは、正義への確固たる信念やその激しい性格などから当時の黒人指導者の多くと関係を断つなかで、アダムズへの敬意を生涯もち続けたといわれているが（ハミントン 一六九）、二人はその出自や経験などの違いから黒人問題についての認識の違いをみせ、紙上で議論を展開している。その議論とは、「彼女は他の多くの理論家同様、時代を先取りしていた同時に、同時代の人間でもあった」（ハミントン 一六七）といわれる、アダムズの人種意識に起因するものである。アダムズは、人種偏見に根ざす黒人リンチ事件が多数発生していたときに、その愚を非難して進歩的な姿勢を貫く一方、とくに黒人男性への固定観念を捨て切れなかったという点において、当時の白人中産階級出身者としての意識を超えられなかったといえよう。黒人への理解を示しながら、彼女が属していた世界の制約から抜けきれなかったということは、先に論じたライスの場合同様、ウェルズとくり広げた運動や論争などにおいても同様にみられることである。

アダムズとウェルズは、シカゴにおけるリンカーンの生誕百年祭の実行委員としてともに働くなど、さまざまな活動と一緒に進んでいたが（ディーガン 七〇）、二人の関係を象徴的に示すのが、『シカゴ・トリビューン』紙に対する抗議である。同紙が黒人に対する偏見を拡散していたことに対する抗議である。『トリビューン』紙は、一九〇〇年、シカゴの公立学校における人種隔離政策を擁護する記事を掲載していたのであるが、その内容は一方的で、黒人側の意見を聞くことはまったくなかった（ウェルズ 二七五、ハミントン 一六九）。ウェルズは編集者に抗議を申し込むものの取り合ってもらえず、アダムズに協力を求めると、彼女はただちに影響力をもつシカゴ市民の会を結成し、新聞社の上層部に強力な抗議を行ったという（ウェルズ 二七

六一七七)、『トリビューン』紙は、公立学校の人種隔離政策を擁護する社説を掲載することは二度となく、アダムズとウェルズの協力関係が効を奏す結果となったのである(二七八)。白人社会福祉事業家とアフリカ系アメリカ人運動家とのネットワークが新聞社の人種的偏見を打破した一例といえよう。アダムズは、その活動においてつねにウェルズを満足させていたわけではないが(リード 二〇、二九)、新聞社への抗議は二人の関係をよく表しているよう。

アダムズの黒人問題に対する見解の一端は、新聞や雑誌に掲載された彼女のエッセイや彼女の講演会記録などからも知ることができる。⁽⁴⁾たとえば、一九〇〇年十一月十八日付けの『シカゴ・インター・オーシャン』紙には、その前日、アダムズがシカゴ女性クラブで「民主主義と社会倫理」と題して行った講演の要約が掲載され、彼女がリンチを「反民主主義的」と断罪したことが報じられている。アダムズは、その講演会で、白人の子どもを殺したという咎でコロラドの黒人が公開で火あぶり刑にされた事件をとりあげ、「法と秩序を重視する政府があるにもかかわらず、アメリカはもっとも反民主主義的な行為を続け、より高い道德的行為を実行するためのいかなる試みもなされていない」と述べたという。「残虐行為は残虐行為を生むだけだ」とし、「小さい悪を更生させるために大きな悪を犯す必要がなぜあるのか」と問うて、黒人へのリンチを批判していたのである。ウェルズが一九〇一年五月十六日付の『ニューヨーク・インディペンデント』紙に寄稿した記事「リンチとそれを実行する口実」によれば、十九世紀末の十五年間に約二千人もが正当な裁判を受けることなく、絞首刑や火あぶり刑などによって処刑されたという。黒人のリンチに加わり、扇動していた南部の市民は、このようなリンチが「ある種の犯罪を処理する唯一の有効な方法だと心から信じていた」といわれるが、その根拠は、

「リンチこそ、南部人にとって黒人の人非人から南部婦人を守る死に物狂いの努力にほかならない」という「思い込み」によるものであった。ウェルズが手に入れた新聞の社説などの九十九パーセントは、そのような「思い込み」によってリンチを正当化していたことであるが、彼女はそれを打破する根拠を、リンチの数とそれを受けるに至った罪を具体的に明記することで、黒人がリンチされる主因が人種偏見にすぎないことを立証したのである。

『インディペンデント』の記事において、ウェルズが「アダムズの力強いペンによる熱心な嘆願」という表現でその反リンチ運動への支援に言及しているように、アダムズは実際その問題についてもペンの力を行使していた。彼女は第一次大戦前までに百五十以上のエッセイを雑誌などに投稿し、いわばジャーナリズムの力を利用して自身の福祉事業を展開していたが（デイヴィスヘー 一九九）、黒人のリンチ事件についても、積極的に発言していたのである。一九〇一年一月三日付けの『インディペンデント』紙では、「法への敬意」と題して、リンチへの反対を表明している。それがおもに階級差別、性差別に起因していることを明言して、南部で増えつつあったリンチに対する抗議を、自治国に住む者の当然の権利として行っている。自らを南部にとつての部外者と位置づけながらも、いかなる国家でも進歩を後退させるような行為を公に行ったときには、他の文明国家が介入するように、自治国のいかなる場所に住む者にとつても他の地域へ抗議する権利を有すると主張しているのである。

アダムズは、犯罪の抑止力になると主張して南部人が行っていたリンチについて、「未発達状態の南部黒人は恐怖によって制圧されなければならない」という主張に内在する、「低い階級への軽蔑心にもとづく貴族主

「義的な態度」を暴く。しかも、このような傾向は、「低い」階級の者が民主主義的な発達を示し、特別の恩恵を求めるのではなく、人間としての権利などを要求するときにとくに顕著であることをフランス革命時など、過去の歴史を例にあげて指摘している。南部においては人種的敵意も加わって問題が複雑化し、奴隷主であった者が元奴隷を同じ市民とみなすことができないなかで、後者が前者の財産などを脅かす存在になったときに、罰の加え方が「口では言い表せないほど残酷性を帯びる」と述べている。そして暴力による懲罰がつねに成功しないだけでなく、関係者すべての道徳的墮落を招くだけだと主張し、「暴力は犯罪を処理するにもっとも効果を期待できない方法であり、自制の教えを定着させるにもっとも不合理な試みである」と断言している。アダムズは、懲罰の問題を階級の問題と結びつけて論じているのである。

リンチという「残酷で恐ろしい」行為が、女性の生命と名誉を安全に保つためという、騎士道精神の名のもとに行われていることに關しては、法と秩序と正義が勝っている国や地域でのみ女性の名誉が守られると述べ、そのことをもっともよくわかっているのは女性であると主張している。暴力によって守られる女性は、野蠻人の女性のように守られることを自らに許し、彼女は依然として男性の所有物とみなされなければならないと結論づけている。アダムズにとって、リンチは南部女性の男性への従属を示すものでもあったということである。

ウェルズはその自伝においてアダムズを「アメリカでもっとも偉大な女性」と呼んでいるように(二五九)、彼女への敬意を失うことはなかったといわれるが(ハミントン 一七三)、その『インディペンデント』紙における記事については、いち早く同紙で反論している。アダムズの「訴えの力を減ずることを何も言いたく

ない」と断りながらも、彼女の主張の前提が、リンチで死んでいった数千の人びとの魂を傷つけると思われる無意識の「不適切な憶測」にあることを指摘している。新聞の社説などの九十九パーセントが前提としていた、「リンチこそ、南部人にとって黒人の人非人から南部婦人を守る死に物狂いの努力」であり、「ある種の犯罪を処理する唯一の有効な方法だ」という「思い込み」を、アダムズが自らの主張の前提としていることに對する抗議である。ウェルズは、この前提を「まったく根拠のない」ものであるとし、この前提に刺激を受けてアダムズが行ったいかなる提案も価値が減ずるとまで言い切っている。ウェルズが、『インディペンデント』紙で過去五年間に起こったリンチ事件の主要原因を特定し、レイプがリンチの原因になったのは約十九パーセントにすぎず、その半数近くが人種差別のためであったことを示したのは、リンチに強い反対を示していたアダムズのような人物にも潜んでいたこの「思い込み」のためともいえるのである。

『二十年』においてアダムズは、民衆こそがアメリカの大きな資源であり、町村や郡の自治は民衆自身の手によって可能であるという信念を若くして得たと述べている。その信念を父親の友人であったリンカーンから学んだと言い、彼が過去の体験から学ぶ努力をしてその信念を獲得した姿勢は、多民族国家で成功するには必須のことだと述べている。このような考えをもっていたアダムズには、人種差別が社会の自治にとって、「無駄」であり「損失」であった。NAACPの月刊機関誌『クライシス』の一九二一年一月号に寄稿した記事においても、アダムズは、「南部だけでなく、アメリカ中どこでも、酷い人種的対立が大手をふって起こり、非合法で尊大なことがさまざまな形で表れている」という当時の状況を、「国家に対する巨大なる能力の損失」ととらえている。「人種のことについて書くのは難しい」と認め、部外者であると言いつつも、きわめて実利

主義的な見地に立って人種的対立が社会の発展に悪影響をもたらすものとみなし、その是正への提言をしているのである。

だが、ウェルズが指摘するとおり、アダムズが『インディペンデント』の記事において、事実にもとづかない「思い込み」によって論を進めていることは事実である。そのことは、黒人を「下位」の存在としてとらえている記事の基調に表われているばかりでなく、「略奪やレイプをするに至る男の獣性を、公開で残虐なことをしたり、見世物的な罰し方をして制御しようとすることはできない」という一文によく表れている。南部の同胞に送るメッセージとして、黒人の男性が略奪やレイプをする獣性を備えているという前提のもとに、罰の加え方としてのリンチを否定しているからである。ウェルズが反リンチ運動を始めたきっかけとなったリンチ事件のように、無実の人がリンチされるといふような状況や、軽犯罪を犯した黒人が言いがかりのようにリンチされるという状況は、アダムズには深く刻みこまれていなかったといえよう。ウェルズは、それまでに『南部の恐怖』『鮮血の記録』『ニューオーリンズにおける暴徒の支配』などにおいて黒人のリンチ事件の内実を報告していた。だが、アダムズは「自らの考えを公にする前にめずらしいことに宿題をしそこなった」（ナイト三八九）ということであろう。アダムズにとって、リンチは南部における階級問題の亀裂や南部女性の男性への従属を示すものであり、彼女は、結局のところ、犯罪を犯しやすい人種として黒人をとらえ、レイプと呼ばれるものの実態を見抜けなかったということであろう（シェクター 一二五）。

当時、北部の中産階級出身者の多くは、白人、黒人ともにアダムズ同様の認識をもっていただけといわれる（ナイト 三八九）。ウェルズが『インディペンント』紙でリンチに至る原因を詳細に報告したのは、人種対立へ

の強い憂慮を示していたアダムズでさえも超えられなかった黒人男性への偏見を打破したいという強い思いがあったに違いない。学術雑誌や評判の高い新聞・雑誌までが黒人に対する誤った概念を植えつけ（ギディングズ 二八）、十九世紀を代表する黒人指導者のフレデリック・ダグラスでさえも、リンチの件数が増えることに心を痛め、「黒人の側に好色の傾向が強まりつつあると考え始めた」とすれば（ウェルズ 七四）、アダムズの「思い込み」をやみくもに批判することはできないであろう。だが、『インディペンデント』紙でくり広げたアダムズとウェルズのリンチをめぐる論議は、アダムズが同世代の改革者よりもリベラルであったものの、時代の人種意識から完全に自由ではなかったことを示す結果となったといえよう。

IV ワシントン・デュボイス論争のはざままで

「ジェイン・アダムズを除いてアメリカの黒人に関して彼女ほど洞察力と勇氣をもっていたソーシャル・ワーカーはアメリカにはいない」（アスィ 二四九）。これは、一九三二年、デュボイスが、ハルハウスのレジデントとして七年を過ごした社会福祉家フローレンス・ケリーの死にあたって、自身が編集長を務めていた『クライシス』誌に掲載した頌徳の言葉の一部である。ケリーがNAACPに積極的に関わったことを称えるこの記事において、アダムズの名前がより深い畏敬の念をもって言及されていることは、注目に値する。この一文ほど、アダムズとデュボイスとの関係を明確に伝えるものはないからだ。

二人の関係は、同等の権利を有する白人女性と黒人男性との「二十世紀におけるもっとも重要な関係」とも

評されているが（ヒル、ディーガン 二）、アダムズとデュボイスは実際、長きにわたって友人関係を継続していたのである。デュボイスは、黒人のあり方に異なる見解を示していたブッカー・T・ワシントンと論争をくり広げ、やがて黒人指導者間での亀裂を深めていくが、アダムズはその双方とも関係を持続し続けることになる（ヒル、ディーガン 二）。アダムズの黒人問題に対する認識の一端は、異なった見解を示していた二人の黒人指導者の双方と関係をもち続けたことによっても明らかにするのである。

アダムズとデュボイスとの関係は、後者がフィラデルフィアの黒人に関する調査を依頼された時まで遡ることが出来るだろう。『フィラデルフィアの黒人』として結実することになるプロジェクト参加者の人選において、アダムズが重要な役割を果たしたと思われるからである（ディーガン 五五―五八、カット 一六）。このプロジェクトは、フィラデルフィアの富裕な一族出身のスーザン・P・ウォートンによって発案されたものであったが、ウォートンの友人であったアダムズがハルハウスのレジデントであったイザベル・イートンを推薦し、その結果、彼女が『地図と報告書』で実践した方法をデュボイスに伝授する形となったと思われるのである（ディーガン 五六）。

デュボイスは、一八九六年までには、ハーバード大学で博士号を取得し、二年間のドイツ留学も終え、学問の世界で活躍する準備が十分に整っていたにもかかわらず、白人男性中心の学会からは門戸を閉ざれ、社会学者として「主流」の道を歩むことができなかった（ディーガン 五一）。このような状況のなかで、デュボイスは、イートンと連携して『フィラデルフィアの黒人』を出版し、ハルハウスのレジデントであった白人女性社会学者たちとの連携を強めていったのである（五一）。イートンばかりか、その後、ケリーやブレキンリッ

ジなど、他のハルハウス関係者とも連携していくが、そのような関係の中心には、当然ながら、ハルハウス主宰としてのアダムズがいたといえるだろう。

『フィラデルフィアの黒人』は、メアリー・デীগンの研究が示すとおり、ハルハウスのレジデントが一八九五年に出版した『地図と報告書』を模範にしたと言ってよいだろう（五一―六二）。『フィラデルフィアの黒人』には、「アメリカでなされたはじめての社会学的研究」（レスター 三二）との評があるものの、実際には、そのような研究は『地図と報告書』で試行されていた。デュボイスが、ロンドンの貧困調査を行ったチャールズ・ブースによる『ロンドンの人びとの生活と労働』の方式を取り入れ、同時にドイツ留学時に学んだ科学的調査法によって黒人市民の実情を報告したことは事実であろうが（ベイ 五〇）、同様の試みは、すでにケリーを中心にハルハウスで実施されていたのである。改善すべき社会の実態を社会科学の視点で調査するという、その後の社会福祉調査の基本にもなるシステムは、ケリーらによって打ち立てられていたといえるだろう（木原 九一）。

デュボイスは、『フィラデルフィアの黒人』を執筆するにあたって、同市の貧民地区に住む五千人にも及ぶ黒人を訪問したといわれるが（レスター 三〇）、このような試みもケリーらがハルハウス周辺で実施したことであった。デュボイスがハルハウスの方式を踏襲していたことは、ハルハウス周辺の世帯を出身地や賃金別に色分けしたケリーらの地図と、フィラデルフィアの貧民街七区を階級別に色分けしたデュボイスの地図とが、きわめて類似していることでも明らかであろう。デュボイスは、ハルハウスが移民たちに対して行った社会科学的な調査を黒人についてはじめて実施したという意味で、画期的な仕事を成し遂げたといえよう。

デュボイスとハルハウスとの関係は、先述したように、『二十年』においても記録されている。アダムズは、一八九七年の二月十二日のリンカーンの誕生日にデュボイスを講演者としてハルハウスに招待したときのことを記している。生誕百周年の二年前のことである。地中海地方出身の移民たちが、アングロサクソンほどには肌の違いを意識せず、デュボイスの学識豊かな講演を尊敬の念をもって熱心に聞き入っていたと書いている。そしてアメリカ人が自分たちの人種問題に勇氣と知性をもって直面し、移民たちももっと協力してくれれば、難しい人種問題も解決するに違いないと結論づけている。

だが、デュボイスの講演会のことで興味を引くのは、アダムズがそのポスターをカンザスに住む姉に送っていることである（ディーガン 七〇）。カンザスから姉がシカゴまで出てくることは期待していなくても、画期的な行事を近しい家族と分かち合いたいという気持ちであったのだろう（七〇）。デュボイスもこの講演会を重要視していたといわれるが（七〇）、このことは、黒人の学識者がセツルメントで講演すること自体が、白人の主催者側にとっても、黒人の講演者側にとっても、特別なことだったということの証にもなる。

ハルハウスにおけるこの講演会は、一九〇九年二月にシカゴのオーケストラ・ホールで行われたリンカーン生誕百年祭におけるデュボイスの講演会に引き継がれていく。アダムズは、市民によるその実行委員会のリーダーを務め、資金集めにその手腕を発揮したという（ウェルズ 三二二）。講演会が行われたのは、N A A C Pの創立日でもあり、アダムズとデュボイスとの連携をもっとも象徴的に示す出来事といえるだろう。N A A C Pは、一九一九年に出されたその政策綱領によれば、黒人男女すべてに白人男女と同一条件での選挙権や教育を受ける権利、公正な裁判を受ける権利などを求めている団体であった。いわば、黒人の基本的人権を求め

て設立されたこの団体に、アダムズはその名声とカリスマ性をもって設立メンバーに名を連ね（リード 二一）、デュボイスはやがては機関誌『クライシス』によって發揮されることになる思想の基盤を担ったといえるだろう。

N A A C P の設立は、デュボイスが一九〇三年、『黒人の魂』において正式に発したワシントンへの反対声明にもとづく行動であり、その黒人指導者としての足跡を真つ向から否定するものである。『黒人の魂』の第三章「ブッカー・T・ワシントン氏とその仲間たち」によれば、ワシントンが黒人に実業教育を推進し、富の蓄積をうながして、黒人の中流階級を養成することに傾注したことで、黒人に政治的権力、公民権の主張、高等教育を断念させる結果になったということである（三九）。アダムズが N A A C P の設立メンバーとしてその名を連ねていることは、デュボイスの主張に賛同し、ワシントンの足跡を否定した証ともとれるが、彼女は後者との関係を断つことはなかった。アダムズの黒人問題への協力は、デュボイスかワシントンかという単純なものでなく、それを総括するものであったという証であろう。

デュボイスは、ワシントンの支持者を自らの友人リストからはずしていったといわれているが、アダムズだけは例外であった（ヒル、ディーガン 二二）。デュボイスにすれば、全国的な名声を獲得していたアダムズの参加は、そのこと自体がインパクトをもっていたということであろう（シェクター 一四二）。そのことを裏づけるように、『ニューヨーク・イヴニング・ポスト』紙の社主オズワルド・ヴィラードは、アダムズを N A A C P 精神の具現者にとらえ、奴隷制廃止論者の祖父ウィリアム・ロイド・ガリソン宛ての手紙で、「協会は『聖ジェイン』とその仲間のような暖かい友人を得て幸運だ」と書いている（ディーガン 七二）。当時の

ジャーナリズムはアダムズを「聖ジェイン」「民主主義の天使」などと呼んで時代の寵児に仕立て上げ、その名前は全米中に知られていた（フラデン 九五、デイヴィスへ1）一九九）。NAACPはその名声こそが、協会の広告塔として必要だったのだろう。

同時代の作家シャーロット・パーキンズ・ギルマンは、アダムズの招待を受けてハルハウスに三カ月滞在しているが、自伝において彼女のことを次のように評している。

彼女はじつに偉大な女性だ。彼女は私が知っている誰よりも広い心をもっている。問題を偏見なく受けとめ、その周りを歩き、すべての人の視点を公平に斟酌することができた。（一八六）

アダムズのこのような態度は、「論争に際して中庸の姿勢を保つ性格と習慣をもっている」という自己分析にも裏づけされるが（リード 二〇）、その現実主義的な考えに根ざすともいえよう。彼女は、はじめての著作『民主主義と社会倫理』において、自分の論理を実生活で試さない社会学者を批判して、「隔離された協道からでは社会倫理の標準はあげることができない」（六）と述べている。自ら社会学者としての資質をもちながら、行動への意欲に駆りたてられて彼女はハルハウスを開設したのであるが、このような現実主義的な態度は、彼女が黒人問題に対してワシントンかデュボイスかという態度を示さなかったことに通じていよう。アメリカを平和で民主的な社会にするために、健康で、教育のある市民の育成を望んだアダムズは、生きる行為としての現実を重要視し、そのなかでは、伝説的ともいえるデュボイスとワシントンとの亀裂のなかでも、その

周辺を歩き、両者の視点を公平に斟酌したということであろう。

V セトルメントの隔離政策

黒人が社会福祉の対象からも除外されたといわれる二十世紀への転換期のアメリカで、アダムズをはじめとするハルハウス関係者は、黒人問題への関心が同時代の人びとに比べて強かったといえるだろう。時代の偏見を超え難かったさまざまな証拠はみられるものの、その制約のなかで進歩的な考えを示し、現実を鑑みながらその考えを実行したといえよう。

当時、セトルメントは、人種偏見の強い白人移民たちへの影響を恐れて黒人を締めだす傾向にあったが、ハルハウスもこの点では決して例外ではなかったようである（デイヴィス〈3〉 二二―二三）。黒人がまれにクラスやクラブに現れることがあっても、そのことで白人の参加者が減るのをレジデントが恐れたため、必ずしも歓迎されなかったという（一二二）。ハルハウス内に開設された働く女性のための宿舎「ジェイン・クラブ」についても同様で、その五十年の歴史において黒人は一人も受け入れられず、完全に除外されていた（フィルポット 三二七）。働く女性によって開設され、協同組合方式で運営されて成功をおさめた画期的な施設であったが、アダムズから運営を任された働く女性たちは「白人のみ」という政策を打ちだし、移民は受け入れても（ブラウン 三八九）、黒人は受け入れなかったのである（フィルポット 三二七）。

ハルハウスは、このように時代の風潮を踏襲していたが、一方、黒人たちへの生活改善に向けた努力を積極

的に行ったことも事実で、シカゴの黒人貧民地区におけるセツルメントの開設には深く関わっている（デイヴィス〈2〉 九四）。ブラックベルトと呼ばれるシカゴの黒人貧民街の端に位置していたフィリップ・ウェンデル・セツルメントは、白人と黒人のレジデントを配置し、両人種がともに利用できるように努めた数少ないセツルメントであったが、ハルハウスのレジデントたちの支援をもって開設にこぎつけている（九四）。ブラックベルトのもう一方の端に位置していたフレデリック・ダグラス・センターも、同様に両人種のためのセツルメントであったが、アダムズはその資金作りを手伝っていたという（ラーシュ・クイン 一五）。ハルハウスは、さしずめ、自分たちのホームグラウンドでは黒人問題に深く関わることはなかったが、シカゴ市内の他の地域の黒人問題には積極的だったともいえるよう（デイヴィス〈3〉 一二二）。

ハルハウスの黒人問題への関与は、ボーエンの『シカゴの有色人種』によっても明らかである。彼女はアダムズの誘いに応じてハルハウスの活動に参加し、次第にその中心人物の一人として社会活動を拡大していったシカゴの資産家夫人であった。早くからシカゴの黒人コミュニティの窮状に目を向け、黒人問題が次第に深刻化しつつあった一九一三年には、『シカゴの有色人種』を発表するに至っている。これは、一九〇七年にハルハウス内に設立され、ボーエン自身が会長を務めていたJPA（青少年保護協会）によって出版されたもので、この協会は、アダムズが一九〇一年に設立し、政府に先駆けて法廷内に保護観察官を配備するなどした、JC（青少年法廷委員会）が発展・吸収されてきたものである。JPAとなつてからは、シカゴの青少年の健全な育成を目指して、人種差別、児童労働、売春などの問題の調査にあたっていた。『シカゴの有色人種』は、そのような調査の一つの成果であり、シカゴの黒人がいかに支援を必要としていたかを、教育、雇用、住居、

組合活動、女性労働、裁判などの観点から、明確なる数値と実例をもって示したものである。

『シカゴの有色人種』では、その冒頭から、二十世紀初頭のシカゴで黒人の少年少女がおかれていた悲惨な現実が報告されている。黒人の人口が全人口の約四十分の一に過ぎないなかで、刑務所に入っている少年の八分の一、少女の三分の一が黒人だという数値を示し、異常なほど高い比率で黒人が獄につながれている状況が示されている。また、売春宿に「家政婦」として雇われる少女のほとんどが黒人であるという現実が提示され、白人の少女に同様のことをすれば、売春の仲介者として告発される可能性の高いにもかかわらず、黒人の少女には売春斡旋のようなことが公然と行われていることが報告されている。このような状況を生みだしているのは、ボーエンによれば、人種差別以外にはなく、その改善策は、その撤廃以外にはないという。『シカゴの有色人種』の最後で彼女は、「黒人の少年少女の生活はあらゆる点において人種的制限によって狭められており、シカゴの全黒人が理解され、公平に扱われないかぎり、少年少女が助けられることはない」と述べ、改善への道が人種差別撤廃であることを主張しているのである。

『シカゴの有色人種』では、差別を受けている黒人の悲惨さが、移民との比較においても指摘されている。後者が移民直後の貧しさから脱出する機会に恵まれているのに対し、前者にはその機会が閉ざされていることを明らかにしている。

公立学校の課程を終了し、よい賃金を稼いでいる移民の家庭の進取の気性に富んだ若者は、次つぎと成功して、家族全員をより豊かな地域に移り住まわせている。その豊かな地域では、次第に移民直後に長屋で

暮らしていたことなどまったく感じさせなくなっていく。一方、黒人は、どんなに野心に満ちていても、家族を転居させるどころか、自分自身でさえも、町のよりましな場所に移り住み、そのような地域で友好関係を築くことはきわめて難しいと気づくようになる。

ボーエンは、黒人と移民との間で格差が生まれている原因が、黒人には雇用が保障されなかったためであるとし、野心に満ちた少年が何度も就職に失敗したあげく、非行への道をたどると述べている。就職が保障されなければ、高等教育への意欲が薄れるわけで、ある工業学校の校長は、黒人の子どもに技術を身につけさせても、就職することはきわめて難しいのでやりがいがないと嘆き、シカゴの代表的ビジネス・カレッジは、一つを除いてみな公然と黒人を差別していたという。その一つも千二百人の白人学生に対してたった二人の黒人学生を受け入れているだけで、それでも、黒人を受け入れることで、学校経営に支障をきたしたという。深い差別が黒人のより高い教育とより高度な仕事への道を阻んでいたことになり、それが悪の循環をきたしていたことがボーエンの報告から浮かびあがってくるのである。

同様に貧しい状況にありながら、移民と黒人との間に格差が生じている状況は、アダムズも『二度目のハルハウスの二十年』で指摘している。イタリアなど南ヨーロッパの国々からの移民たちは、その子どもたちが工場で働き、アメリカ化を果す過程で非行に走る危険に直面すると、数世紀にわたって培われた文明の伝統で家庭のモラル教育を子どもたちに施すが、アフリカ系の家庭では、ヨーロッパ人よりも古い文明の歴史があるにもかかわらず、奴隷制によってその伝統がとぎれてしまったため、移民の家庭のような道徳的指導が行き届か

ないという指摘である。黒人問題に対して「アメリカ人の生活におけるもっとも由々しき問題」という認識を抱き、人種間に憎しみが生じている状態を国家の損失ととらえながら、黒人の非行の原因をその家庭教育の不備に求めてしまうところは、やはり当時の中産階級層の考えを反映しているといえよう。黒人家庭における躰の不備については、ボーエンも『シカゴの有色人種』において指摘しているが、貧困や差別から生じる黒人家庭の諸問題を国家のシステムの不備に求めることなく、個人の問題にしてしまう傾向は否めないのである。

トマス・フィルポットによれば、アダムズやボーエンなどセツルメントの活動家は当時における黒人問題のもっとも良き理解者であったが、彼女たちのなかにも純然たるカラーラインが引かれていたという(三〇二)。NAACPの設立メンバーとして人種間の「社会的平等」を支持していたと批判され、人種統合論者とみなされていたが、実際には、人種差別には反対しても人種統合を支持していたわけではなく、「平等」という語を周到に避けていたともいわれる(三〇二)。当時の一般の白人には、「社会的平等」は「最悪の場合には」、異人種間結婚を意味し、少なくとも、近しい社会的接触を意味していたため、アダムズたちもそのような白人たちから巻き返しを受けないように注意していたという(リード 二〇―二二)。

このことは、『シカゴの有色人種』においても明らかで、ボーエンは、黒人たちが差別を受けている状況や彼らの困難な状況を報告しつつも、その解決策として、人種の平等を謳っているわけではない。「よく理解され公正に扱われるべき」という表現に終始し、シカゴは、その伝統にしたがって、黒人を「公平に扱っている」と黒人間で評判である、という類の表現さえみられる。「黒人は社会的追放には怒らないが、市民としての権利や経済的な権利を激しく要求している」と述べ、権利を認めれば、黒人は人種統合が叶わなくても満足

することを暗に仄めかしてさえるのである。

その死にあたって黒人への理解をデュボイスに称えられたケリーは、一九二〇年、彼が機関誌に社会的平等は「政治的、経済的平等同様、人間の権利だ」と書いたことに反対し、NAACPが彼の発言を退けなければ、脱退すると脅迫したとも伝えられている（フィルポット 三〇二）。彼女はその後、デュボイスの主張を「完全に明白な事実」と認めたということであるが（アスィ 二五四）、ケリーの態度は、NAACPの設立メンバーでさえ、その設立時にあって、黒人の白人同様の権利を求めたその政策綱領を真に理解していなかったということを示しているよう。

フィルポットは、ハルハウスを黒人たちに「奉仕するふりをしていた」セツルメントと呼んでいる（三三四）。きわめて厳しい批判であるが、この批判は黒人たちがハルハウスにおいてつねに「ゲスト」であったという意味では正しい。アダムズは、いち早くデュボイスやワシントンなど著名な黒人指導者を招いただけなく、後年「黒人の母親クラブ」の結成を援助しているが、そのメンバーは通常の名簿に載ることはなく、年に一度写真をとって活動の証拠を残していただけだったという（三三四―三五）。セツルメントの関係者は、理想主義者であると同時に現実主義者であり、セツルメントにおける人種の統合は近隣の現実には「悪影響」を及ぼすことをわかっていたということであろう（三〇三）。

たとえば、一九一三年に社会福祉の雑誌『サーヴェイ』に寄稿した論文で、法のもとの平等が否定されている黒人たちの状態が奴隷解放宣言の精神に対する国民の無関心によって生じていると主張しているアダムズは、そのような状態に終止符が打たれ、黒人が社会的不平等の状態を克服する日が来ることを望んでいたと思われる

る。だが、有名な黒人を招待することさえ嫌う隣人が多いなかで、彼女は現実を優先する姿勢をとり、N A A C Pの会合から帰って会合のことなどを隣人に聞かれても、議論にならないように注意し、自らの考えを押しつけることもなかったという（フィルポット 三二七）。

一九〇八年の八月、強姦罪に問われた黒人の移送をきっかけに数千人の白人が黒人コミュニティを襲撃して残虐行為に及ぶという暴動がイリノイ州スプリングフィールドで起こった。この暴動は、N A A C Pの結成の機運を高めたといわれているが（リード 一五）、黒人の都市流入が進むにつれて、白人と黒人との対立は激しくなり、アダムズをして「国家的損失」と呼ぶ状態が加速することになる。このような状況のなかで、ハルハウスは「貧しい隣人とともに生きる」というセツルメントのモットーを最大限に生かしてもっとも多かった移民の隣人の問題に傾注し、黒人問題については、現実的には隔離政策を実施していたといえるだろう。

『二十年』で明らかにしている「基本的な類似性が適切に強調されれば、人種、言語、信条、伝統などの比較的本質的ではない違いは超えられる」というトインビーホールバーネットの教えは、ハルハウス周辺の白人の移民たちには真に適用し得たかもしれないが、黒人たちにはそうなり得なかったと言わなければならないだろう。シカゴの黒人人口は、第一大戦後さらに急増していったが、アダムズ自身は、次第に平和運動など黒人問題以外のことに関心を強めていた。貧しい移民たちにとって、ハルハウスは「砂漠のオアシス」であり、アダムズは「人生の最後の支え」であったかもしれないが（ボラチェック 六八、一七七）、黒人たちが同様のコメントを発したという記録を見つけることは難しいのである。

注

- (1) 引用部分の邦訳は、『二十年』については縫田ゼミナール訳、『アメリカの女性の歴史』については小檜山ルイ他訳を参照。その他についてはすべて拙訳。
- (2) ライスの自伝的事実に関しては、リマ・シュルツ、アデル・ハスト(七四〇―四二)を参照。
- (3) 東部の女子大学でも、ヴァッサーやブリマーは黒人を受け入れず、マウント・ホリヨークでは、一九一三年の時点でも、「我われの大学では、黒人を受け入れるつもりはない」と学部長が断言している(ソロモン 七六)。ライスが在学していたときのウェルズリーの学長アリス・フリーマンは、若いアフリカ系アメリカ人女性への支援を惜しまず、ライスは後年、彼女を激励した学長の「楽しそうな微笑み」を思い起こしている(シュルツ、ハスト 七四〇)。
- (4) リンチに関するアダムズとウェルズの記事については、シュルツ編集によるウェブサイトを参照。
- (5) デュボイスとマダムズをはじめとするハルハウスのレジデントたちとの関係は、ディーガン(五一―六二)を参照。

引用文献

- Addams, Jane. *Democracy and Social Ethics*. 1902. Teddington, Middlesex: Echo-library, 2006.
- . *The Second Twenty Years at Hull-House*. New York: Macmillan, 1930.
- . *Twenty Years at Hull House*. 1910. N. p.: Dodo, n. d. 『ハルハウスの20年』縫田ゼミナール訳 市川房枝記念会 一九九六年
- Aphelker, Betina. *Woman's Legacy: Essays on Race, Sex, and Class in American History*. Amherst: U of Massachusetts P, 1982.
- Athey, Louis L. "Florence Kelley and the Quest for Negro Equality." *The Journal of Negro History* 54. 4 (1971): 249-61.
- Bay, Mia. "The World Was Thinking Wrong About Race: The Philadelphia Negro and Nineteenth-Century Science." Katz and Sugrue 41-59.
- Bowen, Louise de Koven. <1> *The Colored People of Chicago: An Investigation Made for the Juvenile Protective Association*. Chicago: Rogers

- and Hall, 1913.
- . 〈2〉 *Growing Up with a City*. 1926. Urbana: U of Illinois P, 2002.
- Brown, Victoria Bissell. *The Education of Jane Addams*. Philadelphia: Pennsylvania P, 2004.
- Davis, Allan. 〈1〉 *American Heroine: The Life and Legend for Jane Addams*. New York: Oxford UP, 1973.
- . 〈2〉 *Eighty Years at Hull-House*. Chicago: Quadrangle, 1969.
- . 〈3〉 *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement 1890-1914*. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.
- Deegan, Mary J. *Race, Hull-House, and the University of Chicago: A New Conscience Against Ancient Evils*. Westport, CN: Praeger, 2002.
- Du Bois, W. E. B. *The Philadelphia Negro: "Together with a Special Report on Domestic Service by Isabel Eaton."* 1899. New York: Cosmo, 2007.
- . *The Souls of Black Folk*. 1903. New York: Oxford UP, 2008.
- Early Prejudice Against Women Doctors*. *New York Times* 29 Oct. 1893, 26 Dec. 2008. <http://query.nytimes.com/mem/archive-free/pdf?_r=1&res=9A02E7DB173EEF3A2575AC2A9669D94629ED7CF>.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Free, 1989. 『アメリカの女性の歴史 自由のために生まれて』小 櫛山ルイ・竹俣初美・矢口祐人訳 明石書店 一九九七年
- Fradin, Judith Bloom, and Dennis Brindell Fradin. *Jane Addams: Champion of Democracy*. New York: Clarion, 2006.
- Giddings, Paula. *When and Where I Enter: The Impact of Black Women on Race and Sex in America*. New York: Bantam, 1984.
- Gliman, Charlotte Perkins. *The Living of Charlotte Perkins Gilman: An Autobiography*. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- Gordon, Lynn D. *Gender and Higher Education in the Progressive Era*. New Haven: Yale UP, 1990.
- Hamington, Maurice. "Public Pragmatism: Jane Addams and Ida B. Wells on Lynching." *The Journal Speculative Philosophy* 19, 2 (2005): 167-74.

- Hill, Michael R., and Mary Jo Deegan. *Jane Addams, the Spirit of Youth, and the Sociological Imagination Today*. 28 Feb. 2009. <http://www.sociological-origins.com/files/ASA_2007_Hill_Deegan_Paper.PDF>.
- Katz, Michael B., and Thomas J. Sugrue, eds. *W. E. B. Dubois, Race, and the City: The Philadelphia Negro and Its Legacy*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1998.
- . "The Context of *The Philadelphia Negro*: The City, the Settlement House Movement, and the Rise of the Social Sciences." Katz and Sugrue 1–37.
- Knight, Louise W. *Citizen: Jane Addams and the Struggle for Democracy*. Chicago: U of Chicago P, 2005.
- Lasch-Quinn, Elisabeth. *Black Neighbors: Race and the Limits of Reform in the American Settlement House Movement, 1890–1945*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1993.
- Lester, Julius. Introduction. *The Seventh Son: The Thought and Writings of W. E. B. Dubois*. Ed. Julius Lester. Vol. 1. New York: Vintage, 1971. 1–152.
- Muncy, Robyn. *Creating a Female Dominion in American Reform, 1890–1935*. New York: Oxford UP, 1991.
- Philpott, Thomas Lee. *The Slum and the Ghetto: Immigrants, Blacks, and Reformers in Chicago, 1880–1930*. Belmont, CA: Wadsworth, 1991.
- Polacheck, Hilda Satt. *I Come a Stranger: The Story of Hull-House Girl*. Ed. Dena J. Polacheck Epstein. Urbana: U of Illinois P, 1989.
- Reed, Christopher Robert. *The Chicago NAACP and the Rise of Black Professional Leadership, 1910–1966*. Bloomington: Indiana UP, 1997.
- Residents of Hull-House. *Hull-House Maps and Papers*. 1895. North Strand, NH: Ayer, 2004.
- Rousmaniere, John P. "Cultural Hybrid in the Slums: The College Woman and the Settlement House, 1889–1894." *American Quarterly* 22. 1 (1970): 45–66.
- Schechter, Patricia A. *Ida B. Wells-Barnett and American Reform, 1880–1930*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001.
- Schultz, Rima Lunin, ed. *Urban Experience in Chicago: Hull-House and Its Neighborhood, 1889–1963*. 5 Aug. 2008. <<http://www.uic.edu/>>

jaddams/hull/urbanexp\.

——, and Adele Hast, eds. *Women Building Chicago 1790–1990: A Biographical Dictionary*. Bloomington: Indiana UP, 2001.

Solomon, Barbara. *In the Company of Educated Women*. New Haven: Yale UP, 1985.

Starrett, Helen Ekin. *After College, What? For Girls*. Boston: Peters, 1896.

Stebner, Eleanor J. *The Women of Hull House: A Study in Spirituality, Vocation, and Friendship*. New York: State U of New York P, 1997.

Trattner, Walter I. *From Poor Law to Welfare State: A History of Social Welfare in America*. New York: Free, 1974.

Wells, Ida B. *Crusade for Justice: The Autobiography of Ida B. Wells*. Chicago: U of Chicago P, 1970.

木原浩信 『J・アダムズの社会福祉実践思想の研究』 川島書店 一九九八年

山口ヨシ子 「女性改革者たちの社会福祉ネットワーク アダムズ『ハルハウスの二十年』」神奈川大学『人文研究』一六七号（二〇〇九年）一一二
八頁